



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	各グループの発表とディスカッションの概要
Relation	第6回 人文・社会科学系研究推進フォーラム報告書 II ワークショップの記録 「人社系が参画・先導する学際プロジェクトとは」
Issue Date	2021-03-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/83463
Type	conference presentation
File Information	JF6_hokudai_2-3_Groups.pdf



グループ 1

リーダー：

川人よし恵（大阪大学 経営企画オフィス URA 部門 チーフ・リサーチ・アドミニストレーター）

サブリーダー：

田中 晋吾（北海道大学 大学力強化推進本部 研究推進ハブ URA ステーション 副ステーション長／主任 URA）

発表内容

～人社系主導のドリームプロジェクト～

グループ1では、「人社主導のプロジェクトとは」というテーマをブレイクダウンして、メンバーの皆さんに「人社系主導のドリームプロジェクト」のアイデアを事前に検討していただき、共有するところから議論を始めました。

出していただいたアイデアというのが、次の七つになります：火星に住むための研究プラットフォーム、SDGs を結節点としたインタープリター育成プロジェクト、「言えない、ごめんなさい」支援 AI 開発、社会スラックの設計、人・機械・自然・宇宙関係の再構築プロジェクト、Comprehensive Communication Platform プロジェクト、宇宙人との共同研究に備えるプロジェクト。メンバーが各自のアイデアについて簡単に説明をした後、いろいろ気づいたことや、質問等を重ねていく過程で、人社系に期待される役割や強みに関し、次のような議論がありました。

例えば、共通するキーワードの一つとして「関係性のシステムの再構築」が挙げられました。一番大きな話としては、人間中心の話から、自然、エコシステム、宇宙空間まで、システム全体としての再構築が、今必要になっているのではないかという意見が出ました。そういったシステムを維持するための仕組みとして位置付けられるものとして、何名かが対話やつながりの重要性に言及するアイデアを提案していました。「言えない、ごめんなさい」は、対話が断絶してしまうと最悪の場合戦争などになってしまうけれども、最低限対話が続けている限り、大丈夫な場面というのはかなりあるので、個人にしても社会としても、関係を維持する仕組みを開発していこうという内容です。「イン

ターブリター」はつなぎ手の育成ですし、「コミュニケーションのプラットフォーム」も関係性の維持構築にあたります。また、「社会スラックの設計」は、無駄とされているものが非常時に生きてくることもあるので、社会におけるバッファの許容範囲を模索しつつシステムに取り込んで設計してはどうかという、無駄なものとしてでないものとの関係性を柔軟にカバーできるようなシステムの構築の話になります。こういった関係づくりの仕組み自体を進化させていくことが、システムとしての成長につながっていくという議論を行いました。

その他、人文学と社会科学の間でもアプローチが異なるという指摘があり、特に人文学はデータにとらわれずより広い視野に立ったアプローチが可能ではないかという議論がありました。「宇宙」に関する2件のプロジェクトのアイディアでは、想像力も使いながらアジェンダの設定をしたり、視点の転換、例えばあえて宇宙から地球を見るという一つ外側の枠を設定することで新しいアイディアが生まれたり、課題の解決のアプローチを見つけることも可能ではないかということについても言及されました。

(発表者：川人)

【ディスカッションの概要】

グループワークの時間が限られていたことから、事前にメンバー全員が「人社系主導のドリームプロジェクト」のアイディアを検討して google スプレッドシート上に書き込み、当日はそのアイディアを共有するところから議論を開始した。1人2分強の持ち時間を使い、自己紹介やドリームプロジェクトとそれを考えた理由などを添えて各自のアイディアを紹介した。その場で出されたキーワードや質問等を記録するツールとしては petari を使用し、その後ディスカッションを行う際の補助とした。メンバーが提案した七つのプロジェクトタイトルと概要は、以下の通りである。

- ・火星に住むための研究プラットフォーム：「火星に住む」と想定して現地の気候等が人間に与えるインパクト、望ましい住居、食糧生産のあり方等を具体的に検討することで地球にある問題点にも解決方法を見出す。

- ・SDGs を結節点としたインタープリター育成プロジェクト：超学際的研究で必要とされているインタープリター育成について、人文・社会科学からの貢献可能性を検討する。また、同時に新たな課題設定や価値創造にもかかわり、人文・社会科学ならではの知見をいかす。
- ・「言えない、ごめんなさい」支援 AI 開発：コミュニティや社会がうまく機能するためには辛抱強い対話に向けて、言いにくいごめんなさいを伝えることを支援する技術を開発する。それにより、対話が途切れない社会構築に貢献する。
- ・社会スラックの設計：平時の効率化優先のためだけではなく、大地震やパンデミックなどの非常事態に備えるために、社会システムに「遊び」であるスラックを予め用意しておく。
- ・人・機械・自然・宇宙関係の再構築プロジェクト：技術と政策との関係（AI の導入による倫理的問題）や技術と人間との関係（例えばヒューマン・エンハンスメント）等、個別には議論されてきた事柄をつなげたときの、全体像における価値設定や世の中の秩序の在り方自身をまず議論をして、科学技術や制度といったツールに関する大きな問題設定を行う。
- ・Comprehensive Communication Platform プロジェクト：文化的背景や身体的状態などの違いによりコミュニケーションが十分に成り立たない場合や、何らかのコミュニケーション手段は持つものの、意思疎通が難しかった相手とも、価値観や認識等を共有できる真に包括的なコミュニケーションプラットフォームを開発する。
- ・宇宙人との共同研究に備えるプロジェクト：宇宙という一つ外側の枠を設定して「共同研究」を捉え、その実現のためのアジェンダ設定をすることで、地球上での新たな共同研究を生み出すきっかけを創出するとともに、世界平和構築にも貢献する。

アイデアの紹介に続き、20 分程度の時間をかけて、全プロジェクトを俯瞰して意見交換を行った。議論では、初めに関係性やつながりを取り上げたアイデアが複数あった点が指摘された。人と人から始まり、人と機械や人と自然なども含めた関係の相互作用を、プロセスなど動的な状態も含めて分析する

ことの重要性が指摘され、そういった情報をもとに関係づくりの仕組み自体を進化させることで、大きな対立や破壊的なプロセスを経ずに関係性を維持・発展させ、システムとして成長を遂げることができるという考察を行った。また、非常事態に備えるための社会システムの在り方の一つとして「社会スラックの設計」が提案されたことに対し、そのような重い安定したシステムを作るという選択をするか、変化に対するシステム自体はぜい弱だが新たな環境に適応することで社会を作り直していくかという、複数の戦略オプションを比較検討することの必要性も指摘された。

さらに、理工系と異なり想像力を発揮してまだ到来していない現実について考察ができるという点を、人文社会科学系ならではの強みと指摘する意見が提示された。提案されたアイデアのうち2点が宇宙を取り上げたものだったが、それらがドリームプロジェクトとして提案された理由としては、通常想定するさらに外側の枠組みを設定することで、そこからどのような課題が発生するかを考え、現実の課題に対して異なるアプローチを行うという点が共通していた。

今回メンバーが提案した人社系主導のドリームプロジェクトの多くに通底する考え方として、人間の活動そのものや世界平和への貢献といった哲学的な共通の疑問への挑戦といった要素が含まれていることが議論を通じて所々で指摘され、人文社会系が主導するプロジェクトの一つの形としての可能性が確認された。

グループ2

リーダー：

佐々木 結（京都大学 学術研究支援室（KURA） リサーチ・アドミニストレーター）

サブリーダー：

阿部 義之（北海道大学 大学力強化推進本部 研究推進ハブ URA ステーション URA）

発表内容

グループ1はとても壮大な計画で素晴らしかったですが、私たちのグループ

では、人社主導の学際研究の条件ということで、具体的な事例を交えながら皆さんに意見を出していただきました。

大きくは、田口先生の人間知×脳×AI 研究教育センターのように、環境を整えてやっていくものもありましたし、大阪大学の事例のように、URA が理系と文系の研究者同士をニーズベースでくっつけて、結果的に人社主導として走らせうまくいったというケースもありました。両方のケースに言えるのは、学際をやりましょうとか、文理融合が必要とかいうことではなく、やっぱり研究者の関心、この「AI」というキーワードなりテーマ、「意識」とかそういった結びつきやすいテーマ等、もともとその研究者に関心があったところで、関心を先行させてテーマの主導のもとにやったということです。人間知×脳×AI 研究教育センターが今2年たっても非常にうまく進んでいる理由もそこにあるのではないかと思います。

また、学際研究の担い手である人の話になったとき、世代間の学際研究に対する認識の差、という課題が指摘されました。たとえば若手として参加しているプロジェクト等で、シニア層を巻き込んでいくことが難しいという問題提起がありましたが、それに対して、皆さんから意見を得たところでは、基本的にはやっぱり研究者がやる気にならないといけないのですが、もしもキーパーソンが忙しいなど動きが鈍い場合は、そういう人を含めて、ざっくばらんに個人の立場で話せる場を設定する必要があるのではないかということでした。その中でも、准教授ポジションの人というのが割とフレキシブルに動けるということで、そういう人が入った上で、みんなでプレストをしてみる。教授になるといろいろな分野を背負ってきてしまうので、分野を背負わずに、そういう形でざっくばらんに話し合うような機会があるといいのではないかということです。たとえば、一つの資料を見ながら一緒に話すなど、立場を超えて議論できる場を作るというお話もありました。「遭遇しかない」という言葉はこの文脈で出てきた名言です。遭遇する場がどこかにたまたまあるとか、もしくはURA がそういう場を積極的に作ってくれとありがたいという話もありました。

また、URA に「先生の研究は面白いから、ぜひ他の人にも話してください

い」と言ってもらえれば、研究者のほうも参加しやすいし、集まりやすいのではないかというお話がありました。ボトムアップで研究者をつなげてこられたURAも、いろいろな先生に声をかけるときに、この先生ならやってくれるかなという人に声をかける、ということでしたし、それを見極めるスキルも必要ようです。

(発表者：佐々木)

【ディスカッションの概要】

グループ2では、「人社系主導のプロジェクトとは」というトピックで、事前に petari というオンラインツールに参加者が議論したいことを書き込み当日に臨んだ。当日はまず、アイスブレイクの各自が関与したことがあるプロジェクトなど事例紹介も含め一人ずつ紹介した。すでに人社主導の学際研究を初めたばかりの人、経験はあるけれども文理融合とまで行かず、まとめのところだけ取ってつけたような形になり違和感を感じていた人、やりたいけれども先立つ研究費の選択肢が限られていると思っている人、経験はまだないが老年学、人文学とAIなど、学内で新しい学際研究の芽が生まれつつあると感じている人、学際研究の組織的基盤は整いつつも若手とシニア層の認識の違いに悩んでいる人、など様々であった。

その後、講演の部で話題提供をされた田口氏に、どのような経緯や環境があって文理融合的研究が可能となったか、参加者が質問するところから議論が始まった。田口氏の所属する人間知×脳×AI研究教育センターでは、そもそも、文理融合をやらなければというところから入ったわけではなくて、あくまで意識、自己、社会性、合理性という共通のテーマ、課題から入っている。こういう大きくかつ深いテーマを扱おうとすると、どうしてもいろいろな学問が関係し、これについては誰かの知識、知見が欲しいというようなことで、自然につながる。文理融合という題目や枠組みがまず先にあるとあまりうまくいかないのではないか、という問題提起があった。

一方、学際型研究に対する世代間の認識の差についても課題が指摘された。一般的に、若手の研究者は学際的な研究に対して感じるハードルが低いように

感じられる一方、教授クラスとなると、新たな領域を開拓する時間的な余裕も限られ、消極的にならざるを得ないという状況がある。教授クラスとなると、分野を背負って立つポジションにあることもあり、分野をまたいで相互理解を深め、新たなものを作り出すことに積極的になりづらいという事情もあるだろうと感じられた。

これに対しては、中堅の准教授レベルがキーとなるのではないか、という意見の他、国立歴史民俗博物館の後藤真氏からは、そうしたポジションを越えて議論をできる場づくりが重要という指摘があった。一つの資料を見ながらみんなでブレインストーミング的に話す機会を設けるなど、様々なポジションを離れ多様な人が出会い議論できる機会が一番大事ではないかということであった。

これに関連し、実際に、個別の研究支援の過程で必要に迫られて研究者をつなぎ、結果的に社会学と工学などを結ぶ人社主導の学際研究を実現した URA の事例も共有された。そこではやはり、どの研究者に声をかけるか、というところで興味を持ってくれそうな研究者を見つけるスキルも求められるとの指摘もあった。また、一定のポジションに就くシニアや若手といった立場の異なる研究者間で言いにくいことがある場合でも、おせっかいおばさんのような形で割り込んでつなげる、と言った潤滑油、あるいはファシリテーター的役割も必要とされているのでは、という指摘もあった。

研究者とともに研究の面白さに共感し、その共感を接点に研究者同士をつなぐ役割を URA が果たすことで、学際研究に踏み出しやすい環境が生まれるのかも知れない。最後に、グループ2のワークで印象に残った言葉を記録する。

「我々がこれからの社会とか、これからの世界、人類の未来とか、そういう大きなものを見据えた上で、何を知りたいのか、何を明らかにしたいのか、何を明らかにすれば我々にとってよりよい世界というか、そういうものをつくれるのかという、そういうところから出発して問題を立てていけば、どうしたって文系の学問も理系の学問もつながってくると思うのですよね、必要になってくる。そこなのではないかと思っていますね。文理を融合させなければというところからではなくて。」

「枠組みとか仕組みという点でいうと、研究者たちが自分たちの自由な発想とか自由な関心で、ざっくばらんに話ができるような場をつくると、何か役に立つのかなという気もするのですよね。何かテーマを決めて、これとこれで同じようなテーマだから一緒にやりなさいとか言われても、なかなかこれはうまくいかないと思うのです。むしろ、ざっくばらんに自分の関心はこうで、究極的にはこういうことを明らかにしたいのだというようなことを話し合っているうちに、それをやるためにはこれも必要だねと。こういうことをやりたいのだけれどもとかなんて言っていると、それだったらこちらでできますよみたいな話が出てきたりする。そこは本当にお仕着せではわからないところで、本当に話してみないとわからないと思うのですよね。」

「『遭遇』しかない。とにかくいろいろな全然質の違う研究が遭うとか、人が会うとか、データが合うとか、それに尽きる。」

グループ3

リーダー：

山田 綾子（大阪大学 大学院法学研究科 助教／URA）

サブリーダー：

柳下 恵美（早稲田大学 研究戦略センター 准教授）

発表内容

鈴木先生が10月3日の講演会の最後に、「科学というものは細分化されるものである。それを融合させるにはどうすればいいのかを考えなければならない。」と仰いました。これを正面から受け止めてグループワークのテーマにしたいと思いました。グループ3のメンバーは、研究者、URA、現役大学院生、ファンディング機関にお勤めの方と多様性に富んでおりましたので、まず皆さんには自己紹介をお願いしました。

私自身は、法学研究科に所属しており、支援職としては、15年ほど経歴があります。ポストアワード支援と言われるプロジェクト支援がメインです。大型の研究プロジェクトのサポートが多いことから、こちらから何かお膳立てを

するということは少なく、見てきた限りでは、テーマによって連携できるか否かが決まってくるという感触を持っています。また、人間関係については、既にでき上がっているところがあり、なかなかこちらから持っていくというのは、難しいかなということを常日頃考えています。

早稲田大学からの参加者は、文理融合は単にプッシュするのではなくて、研究上同じ目的を共有する研究者が自然な形で行うのが重要ではないかということを感じておられるということでした。

北海道大学の参加者からは、今回、文化芸術推進事業を支援事例として取り上げていただきました。このプログラムを3年間実施する上で、プレからポストまで、何から何まで全部経験したそうです。ただ1年目では、先生方が本当にやりたいことというよりも、自分たちが進めたい方向に進めてしまったために失敗したということでした。2年目にそこを見直して、本当にやりたいことを優先させたという経験をシェアしてくださいました。

次に、新潟大学からの参加者は、特に、大学院生さんの支援が知りたいということを疑問点で挙げてくださいました。

筑波大学からの参加者は芸術系部局に属しておられ、芸術系というのは、実は製作とか実技とかが多くて、支援がしにくいということを教えてくださいました。ただ、分野によって違いがあり、デザインや感性認知というものについては、スムーズにいろいろとできることがあり、未来社会創造、RISTEX等と協力しての支援経験もあるということでした。

JSTのご所属で、現在はRISTEXを担当されている参加者は、ファンディングの立場から、先生方と協力して、プロジェクトを進めていくに当たって、人社分野における研究支援とはどういうことをしているのかということに興味を持っているとのことでした。

最後に、京都大学からの参加者は臨床心理士として、病院で難病患者を支援されています。難病患者支援の現場では、多職種間の連携が大切で、医学生に対してどのような教育を行えばよいかということを研究テーマの一環として考えているということでした。

ディスカッションでは、大学院生の支援を取り上げ、これについて少し掘り

下げました。大学院生のころから近い立場で支援をしていくなかで、例えばポスターを作るのが得意な大学院生に対して、違うプロジェクトの先生に、この大学院生はこういうことができますよと紹介したりしているという事例がありました。こうやって研究者との距離を縮めることによって、将来的なニーズを知ることにつながっていくのではないかとということを考えました。

研究者は、結局強制されても動いてくれないのではないかと思います。主体は誰なのか、そして研究者にとって魅力的な研究とは何なのかということを知るきっかけとなるのは、こうした若いころからの支援ではないでしょうか。距離を縮める努力をしていくことが大切ではないかなと思います。

一般に、理系に比して研究室体制が希薄とされる人社系において、大学院生が野放しにされていることを常日ごろ懸念していることもあって、これが細分化する学問を融合させるカナメの一つではないのかなということでもとめたいと思います。

(発表者：山田)

【ディスカッションの概要】

2020年10月9日（金）に開催された人社フォーラム・ワークショップの大枠のテーマは「人社系主導のプロジェクトとは」と「課題解決型プロジェクト（の成功）に人社系は必要か」の二つであった。

グループ3は「人社系主導のプロジェクトとは」について、「人社・カナメを探る」を議題として掲げ、参加者は大阪大学、早稲田大学、北海道大学、新潟大学、筑波大学、京都大学、国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）からの7名でグループワークを行った。

参加者がURA、教員、事務職員、学生と様々で、本ワークショップの開催以前に各々の交流が殆どない状況であった。そこでリーダーの進行の下、前半部分は自己紹介を兼ね主にどのような業務に携わっているのか、いかなる問題意識を持っているのかについて各人が説明し、後半部分は共通の問題点を探りながら皆で議論した。

以下にその要約を記述する。

〈前半部分～自己紹介、業務および問題意識に関する各人の発言の要約〉

- ・大学で研究プロジェクト支援をしており、法学は細分化する分野であると感じている。例えば法学研究科の行政法を専門としている教授の支援を通じて、テーマによって連携ができるのかどうかが決まってくるように感じるが、それが他にも応用できるのか？きっかけになるようなテーマを探りたい。
- ・2019年の4月から現在の業務を行っている。これまでに携わった主業務は、環境省関連の研究支援社会科学系の研究拠点形成事業のヒアリングリハーサル参加、国際的なネットワークを有する教員へのインタビュー、海外の大学の訪問・面談等である。文理融合は単にプッシュするだけでなく、研究上同じ目標を共有できる研究者が集って自然な形で行うことが望ましいのではないかと感じている。
- ・学芸員リカレント教育プログラム、申請書、ネットワーク、広報、実施支援、後継プログラム立案、地域ミュージアム・文化施設との連携、理系研究者との連携に携わっており、先生方が本当にやりたいことを優先させることの重要性を感じている。
- ・2020年の4月から所属大学で初めての文系 URA として着任し、主に文系院生の支援をしているので、これをこれからの支援に繋げていきたい。
- ・大学で部局 URA を担当している。ランキング関連、研究広報、産学連携などを主業務としており、分野融合的テーマとしては、デザインや感性認知領域は可能性があること。一方、制作・実技系分野、美術史などは、一般的に融合的展開がしにくい印象がある。
- ・大学院に在籍中である。医療学を普及するにはどのようにしたらよいか、医学生に対してどのような心理的教育を行ったらよいか、という問題意識を持っており、円滑で質の高い学際研究について学びたい。
- ・所属機関で公私空間・実装支援プログラムを担当している。社会問題の解決を現場の人と一緒に考えていく必要があると考える。今後の事業をどうしていくのか、研究支援としてどのようなことをしているのか知りたい。

〈後半部分～前半での意見を踏まえ、下記3点を共通テーマとして議論〉

(1) 若手研究者支援に関する取り組みについて

大学院生に対して積極的に支援を行っている参加者から、旅費支援（現在はコロナ渦で出張不可のため、オンライン学会参加費支援に切り替えて実施）、校閲費用の支援、学振 DC1、DC2 に向けたより良い申請書のためのセミナー開催などの事例紹介があった。なかでもアカデミックスキル・バスケット（院生の得意スキルを活かしてアルバイトを紹介する人材バンク型研究支援）は他の参加者も特に興味を持ち関心を示す事例であった。好事例として、院生の学位取得研究が海外の研究者の目に留まって、共同研究にまでつながった実績も紹介された。

他の参加者の大学においては、申請書作成や旅費の支援、また学振の説明会なども大学全体で実施されている傾向にあるが、特有のテーマに即しては部局内での学振の説明会を企画運営し支援していることも分かった。URA にとって研究者と関連部署をつなぐことは大切な職責の一つであり、大学院生の研究で知財に関わるような相談は、産学連携 MGR と協議して、学内の知財相談会に提出しアテンドしていること、アントレプレナーシップで JST-SCORE の申請に関する情報提供などの支援をしているとの紹介があった。

(2) 文理融合について

分野融合的な考え方が推進されているが、どのような観点でそれぞれの分野の研究者が求めているのかというところに帰着するとの意見があった。単にプッシュするだけでなく、互いに違うことをリスペクトでき、同じ目標を共有できる研究者が自然な形で研究を行うことが重要だが、研究者の個性や研究分野の領域によっては寄り添うことが難しく、研究支援で文理融合を進める際の壁となっているとの意見が出た。

(3) トップダウンかボトムアップか

1年目にトップダウンで広げすぎて上手くいかなかったプログラムが、ボトムアップで狭めて行うことで成功したという事例が挙げられた。しかし、1年目に実施した様々な調査結果がその後のネットワークづくりに活かされたの

で、無駄ではなかったとのことであった。

〈コメントおよび感想〉

最後に研究支援をするにあたり、各先生方の研究領域によっては内容が大幅に異なるという現状があるため、先生方との距離の取り方が難しいということが皆の共通事項としてあることが分かった。限られた時間ではあったが、異なるバックグラウンドを有している参加者各々が抱えている問題意識、さらに人社系研究支援の現状を把握する上で意義ある意見交換ができた。

グループ 4

リーダー：

齊藤 愛（筑波大学 URA 研究戦略推進室 URA）

サブリーダー：

王 戈（北海道大学 大学力強化推進本部 研究推進ハブ URA ステーション URA）

発表内容

グループ4では、いろいろな立場の方にご参加いただいて議論は進みました。人社系の URA はもとより、ファンディングエージェンシーの方、留学生の方、さらに研究者の方にもご参加いただいたので、有益な実例をお聞きすることができました。文理融合の学際研究プロジェクトを進めるにあたっての、URA の関わり方についての問題意識を共有できたのではないかと思います。

●人文社会系を専門とする URA の少なさ

URA に着任して2、3年の方が集まりましたが、たとえ全学で URA が数十人いても、その中で人文社会を専門とする URA はどの大学でも非常に少ないということがわかりました。その中で、支援にあたってどのような形が可能なのかという悩みは共通していました。どうしても理系中心の論理で動いていく運営会議などで、人社系として学内でどう動くのか、研究評価も含めて、難しいところがあるという話になりました。

●学際プロジェクトの理想的な在り方

プロジェクトの始まりから終わりまでを図1に書いてみました。これをたたき台にして、議論を進めました。

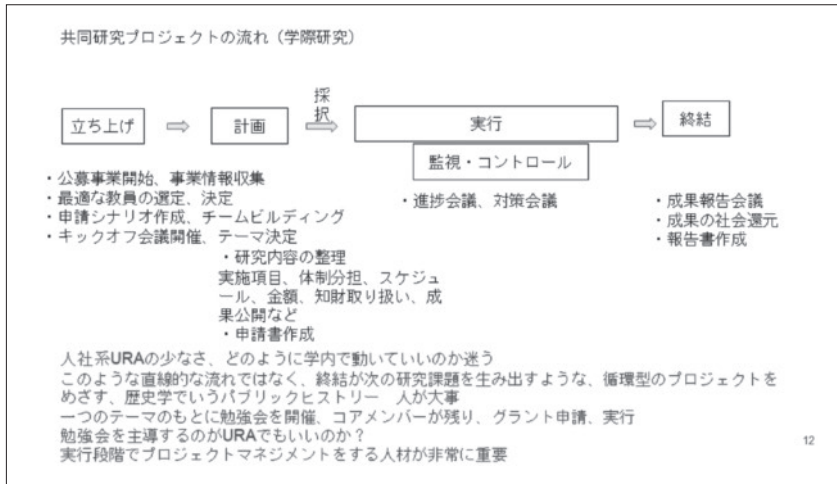


図1 共同研究プロジェクトの流れ（学際研究）

ここで提示されている、直線的なプロジェクトの進行図に対して、実際の例に基づいて、循環型のプロジェクトの在り方の提言がありました。循環型というのは、プロジェクト期間の開始に合わせてチームを作り、終わったら解散というのではなく、何か地域に根差したテーマのもとに、関連する新たなプロジェクトが次々に生まれてきて、終わりが始まりになるような、人の出入りが自由にある、ゆるいつながりの形だということでした。

具体的には、以下のような項目が提示されました。

- ①研究者から一つのテーマに基づいた共同研究の相談が URA に寄せられる
- ② URA がテーマに関わる学内の研究者を洗い出す
- ③テーマに関わる勉強会を月1回くらい開催
- ④コアメンバーが決まってきたら、共同研究を始める
- ⑤グラントに応募する

- ⑥メンバーの都合によって、出入りがある
- ⑦地域の人たちも関わりながら、新しい課題が生まれ、続いていく
- ⑧ URA がポストアワードのプロジェクト運営を支援する

この形は、研究者主導ということで理想的です。研究会も、URA ではなく研究者主導で、URA は伴走したということです。さらに、学際的な研究を積極的に志向するような雰囲気、文化、そういったものを醸成する手助けが、例えば「100 人論文」などの仕掛けを URA が主導するという形でできるのではないか、という意見もありました。

● URA はどのように関与するか

歴史学ではパブリックヒストリーが主流となっていて、地域や市民の協力を得ながら、開かれた形の研究が進められていますが、そういう形のプロジェクトに URA としてどう関わるかという論点が出されました。URA が主導するのではないとしたら、研究者の先生方をどのように学の垣根を越えてもらうか、どのような動機付けが有効なのか、プラットフォームの作り方や、チームメイキングはどうするのか、などです。また、プロジェクトの進行中、伴走しながらマネジメントをする人の重要性が指摘されました。例えばステークホルダーがどんどん広がっていった場合に、それらを仲立ちして、翻訳して、つないでいく人が必要です。このあたりに、プレアワードの支援に加え、URA の果たせる役割があるのかもしれません。

(発表者：齊藤)

【ディスカッションの概要】

- 1) グループワークの表記：人社・URA に何ができるか
- 2) グループワークのテーマ：人社系 URA は、文理融合プロジェクトの立案・運営・社会還元にどのように関わるかについて、意見交換を行う。
- 3) グループワークの構成：
 - 15：05～15：30 導入と事前提出資料に基づいた自己紹介
 - 15：30～15：50 ディスカッション

15:50～15:55 まとめ

自己紹介の枠組み

- Q1 ご自身の担当業務や経歴、今は何をされているか等
 Q2 なぜ今回のシンポ及びワークショップに申し込んだのか
 Q3 10月3日(土)のシンポで何に関心を持ったか
 Q4 本日ワークショップで共有したい情報(問題意識や事例、リソース、課題、単純に知りたいことなど)または議論してほしいテーマ

4) 参加者

7名 (URA4名、研究者1名、ファンディングエージェンシー1名、大学院生1名)

5) ワークショップの概要

◆自己紹介から出された主な興味関心・問題意識 (参加者の発言順)

- 融合研究の重要性と必要性は長年叫ばれ (例えば文理融合のような異なる分野による融合研究や、超学際研究のような研究者と実践者による融合研究等)、それを実施・促進する様々な議論や政策施策 (例えば、助成や評価、人材育成) が行われてきた。そうした中、なぜ、いまだにそれらの必要性和重要性について議論するのかを知りたい。
- 融合研究を実施するうえで、具体的にどのような課題があるのかを知りたい。例えば、研究者のインセンティブなのか、プロジェクトを形成する手法なのか、資金が少ないのか、学術的効果を出すのが難しいのか、若手研究者のキャリアなのか。
- 人社系 URA として、文理融合型プロジェクトにどのようにかかわっていけるかを知りたい。どうやって言語や作法の違う人たちがうまくやっていけるのか、研究者にどうやって参加してもらうのか、チームメイキングの最初の一步や、プロジェクト運営の途中をどうするのか、出口戦略または社会実装・社会貢献・社会還元をどうするのか。
- 文系出身の URA が少ない。理系の方々と土壌の違いを日々感じる。人社系主導プロジェクトにおいて、URA が果たす役割や関わり方をどう

すればいいのか、とても知りたい。

- 人文系の業績の評価方法について。どこへ行ってもそういう話になっている。他大学でどのような感じで業績の評価をしているのか、実態を知りたい。
- 「しくみ」として、プロジェクトの設計とか、どういうふうになればチームをうまくつくれるのかということ。
- 研究者が気軽に他の分野の人と交流するような「文化」、そういう「文化」をどうつくったらいいのか、何か URA がお手伝いできることがあるのか知りたい。
- 「100 人論文」のような交流のインフラみたいなもの、またチーム形成などの交流についてのノウハウを知りたい。そして成功例の他にも失敗例も知りたい。
- 研究の成果の社会還元への期待が社会的な流れになっている中、研究者からすると、なかなか意識面でもコスト面でも難しさがあると考える。例えば、理系の方々は研究室に秘書が配置されているなど、一定の形で恵まれた環境がある。しかしそうではない人社系の先生方が、どこまで社会還元を力を注げるかという難しさがある。シンポジウムでも見えてきたように、理系を念頭に置いた技術移転のモデルと、人文学とか社会科学の社会還元とは少し違う。URA の方々から、特に社会還元におけるご苦労とか、日々どういう形でやっているかを知りたい。

◆議論で出された主な意見

- 人社系 URA は、文理融合プロジェクトの立案・運営・社会還元にどういう風に関わるかについて、図 1 が示す共同研究プロジェクトの流れを見ていただきたい。だいたい共同研究の流れは、「立ち上げ・計画・実行・終結」の流れになっていると考えるが、そのうちに URA がどのように・どこに・どういう風に・どれだけの強さでかわかっていくかについて、以下のような意見が出された。
- まず、図 1 が示す流れを前提に URA の関わり方を論じてよいか疑問で

ある。図1の立ち上げと終結はそこでプロジェクトが終わってしまうが、実際のプロジェクトは、終わったところから新しいプロジェクトが生まれ、永遠にたぶん続いていくし、終わったなら生まれてということが続いていくことが前提だと考える。生まれたときとは、実は巡ってきた他のものとの廻り合わせのマッチングでしかないので、スタートがあるわけではないというところがある。

この間に紹介した水循環プロジェクトにおいて、研究者から相談を受けてから、研究企画室（URA）は学内の研究者全員を洗い出しして、「島と水」というテーマで研究者に声かけして、月に1回、ゆるい感じの勉強会をした。そのうちコアメンバーみたいな集団ができて、それを母体に共同研究を始めて、グラントを取りに行った。グラントによって人が入れ替わったりして、常に人は動くが、テーマは変わらない形だった。研究企画室（URA）は研究者からの相談・提案を形にするところから始まり、そのチームを作っていくことを伴走するような形であった。

- URA の役割を考える際、図1のモデルはあくまで URA の視線、すなわち、プロジェクトやお金を取ってくることを前提に整理されたものである。おそらく、前の方が述べられたように、まずは課題や研究の目的そのものが存在し、それらを追求するためにどのような役割を持つ人達がどのように動いていくべきかを考えるものである。水循環プロジェクトの例では、研究者にはすでに、課題や問題意識も持っていて、融合研究をする意識または文化もあった。そこで URA は研究者の相談に乗って、様々な場の運営を助ければよかった。一方、融合研究に対する意識も文化もそれほどない環境においては、URA から率先して融合研究を学習する勉強会を作ったり、学内で啓蒙活動を始めたり、そういった文化を培養する必要性もあるのではないかと考える。

- 文理融合ではないが、研究者と地域の現場との協働のようなプロジェクトの場合も、やはり研究者が持っている課題が循環していて、様々なファンディングにつながっている印象を持っている。そこで、研究者が全部これをこなせるわけではないので、特にポストアワードの実行部分

で、うまく伴走してくれる方が必要である。それは監視・コントロール（図1）ということではなく、どう一緒にプロジェクトを作っていく人になってくれるのか、ということが重要な気がする。

- その中間支援者、伴走してくれる、実際に一緒に動かしてくれる方が必要だと共感する。プレアワード、グラントをとるまでは研究者だけでも頑張ればできるが、とった後そういう方が必要である。いわゆる研究者同士の学際的研究は、PIのがんばりで何とかなるが、地域の方または違う立場の方が入る場合、そのマネジメントをする人、それがURAなのかわからないが、コミュニケーターとかインタープリターのような方がいなければならない。だから、コミュニケーションユニットみたいなものは必要と痛感した。

グループ5

リーダー：

三田 香織（中央大学 研究推進支援本部 URA）

サブリーダー：

白川 芳幸（早稲田大学 研究戦略センター 教授）

発表内容

グループ5は、人社主導の産学連携について意見交換をしました。我々のグループには大学の方も企業の方もおられますし、先週、講演いただいた南先生にも入ってもらい多様な方々のグループとなりました。

二つのテーマを設定して、事前にアンケートを取りました。テーマ1は、人社主導のプロジェクトの現状の認識、テーマ2は、人社主導のプロジェクトの将来展望としました。

まず、テーマ1の現状認識につきましては、参加者が事例を持ち寄って議論しました。例えば、ELSIに関する共同研究、経営コンサルティング的な産学連携、イノベーションの創出に関する調査研究、人社が主導した行政との連携の事例を検討しました。それぞれたくさん課題はあるのですが、共通的

なところは、企業側あるいは行政側が積極的、そして価値をちゃんと見出してきている、あるいは成果が見やすい、そういうプロジェクトが進んでいるということを感じました。検討の中で話題となった事例を紹介します。開発技術等が社会実装できる直前での人社主導の例が多いのですが、もっと初期の段階から人社系が開発に加わると別の何かが加わる可能性があるのではないかと思います。言わば人社系がもつポテンシャルのようなものが生まれる可能性です（図2）。一方、産学連携を経験していない方は、産学連携についていろいろな興味を持たれているとのことですが、具体化する術がなかなか難しいようです。それと、産学連携部門が既に立ち上がっていますので、後続のURAとの関係をどうやって構築していくかというような課題があるという話がありました。

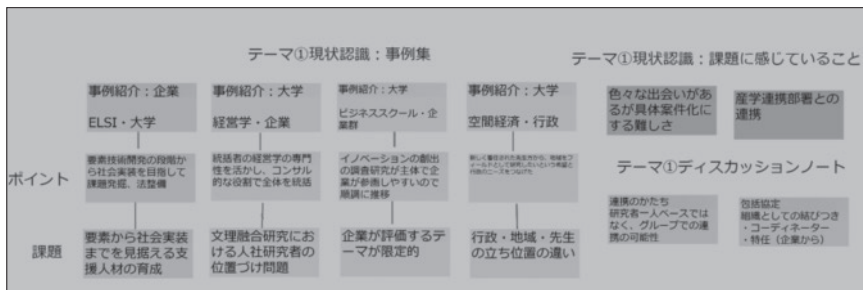


図2

次に、テーマ2の将来展望について意見交換しました。産学連携を進めるには生活に役立つイノベーションを促進する社会ルールの創生等が人社主導に向いているかなということを感じます。具体的な社会課題解決型のプロジェクトを人社が主導すると成果があるのではということがあります。いろいろなアイデアがあるのですが、こういうアイデアを実現するために、人社と産業界をつなぐ人材、これは単なるメッセンジャーという意味ではなくて、さまざまな人文・社会科学の知恵をもって、両者を融合できるような人材の育成が必要になると考えます。さらにちょっと欲張りですが、未来社会に対して、バックキャストとフォアキャストの二方向から物事を見詰めることがで

きる人材が求められていると思います。

これは、ちょっと難問なのですが、人社主導のプロジェクトの価値、そしてそれを担当する URA の評価のあり方を議論しました。まず価値ですが、定量的、具体的にはコスパがよいような観点からは、自動運転の合理的ルールを作るようなプロジェクトには膨大なお金が投じられています。しかし、人社系が参画した多くの産学連携は定性的であり、社会貢献や地域貢献、いわゆるいい意味でのソーシャルインパクトのためのプロジェクトが進んでいると思います。これは、いわば企業の良心、あるいはレピュテーションが欲しい、あるいは PR 活動によって支えられている側面があります。自然科学系のように金銭に換算できる定量性がないことが評価の難しい原因です（図 3）。

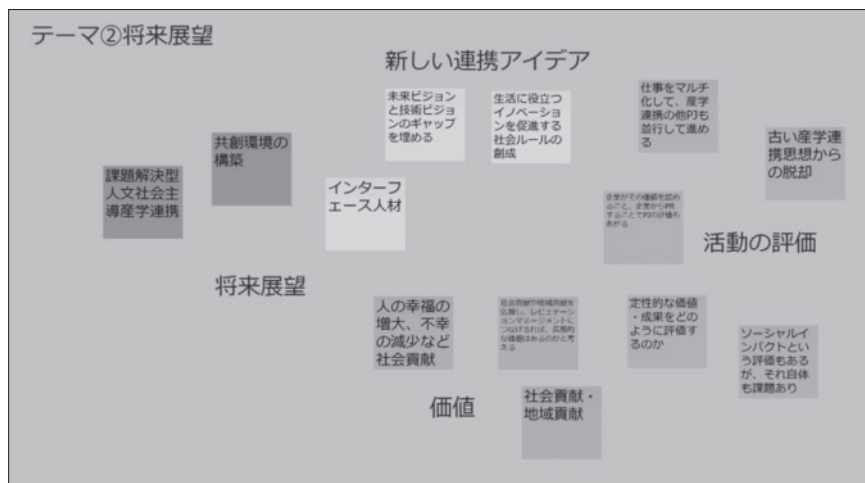


図 3

最後に、URA の評価についてですが、圧倒的に多い理工・自然科学系出身に対して、人文社会系の URA の方は人数が少ない、なかなか外部資金獲得が難しい等の観点からは厳しい評価を受けることがあります。これはどのようにして評価すべきかというのはとても難しい問題で、結論は出ませんでした。ただ言えることは、大学が単独で、あるいは独自で評価するのではなくて、せっかくの機会ですから、人社フォーラムとか RA 協議会等を使って、共

通のあるべき評価指標を議論し、大学側に提案するような活用が必要ではないかというふうに考えました。

以上でグループ5の発表を終わりにさせていただきます。

(発表者：白川)

【ディスカッションの概要】

本グループは人文社会系主導の産官学連携をテーマとして議論を進めることとした。50分という限られた時間の中で有益なディスカッションを運ぶため、ファシリテーターを担当した三田（中央大学）と白川（早稲田大学）は数回に及び打ち合わせを重ねて明確なトピックの選定を行った。その際、人文社会系を専門とするURAが少ないこと、また人文社会系が主導の産官学連携実績は多くないことを考慮したうえで、議論の先にある「解」を導き出すことを念頭に置き、以下二つのテーマを立てた。

テーマ①人文社会系主導の産官学連携についての現状認識（図2）

- ・ 人社系主導（または人社系が加わった）産官学連携に携わった経験がある参加者は事例を紹介していただく。またその際に課題に感じたことや工夫した点等も含めて共有する。
- ・ 未経験の参加者は、始めるにあたり課題に感じていること、経験者から知りたいこと、または新しいアイデア等を共有する。

テーマ②人文社会系主導の産官学連携についての将来展望（図3）

- ・ 新たなタイプの産官学連携のアイデア
 - ・ 多くは経済的メリットが小さく、連携の仕方もはっきりしておらず、事例が少ないという現状がある。研究機関としてこの活動にリソースを割いて支援することへの妥当性について議論するとともに、組織としてどのようにこういった取り組みを評価することで推進していくかを議論する。（価値と評価）
- テーマ①が実務的なものとなっているのに対して、テーマ②は今回登壇者である南先生（京都精華大学）の発表にある人文社会系産官学連携類型モデルを出発点とし、新たな連携アイデアや人文社会系産官学連携活動の評価や価値といった点へ重点をおいた。また、ワークショップの参加者へは事前ア

ンケートとして意見聴取を行い、当日ディスカッションをしながら全員の意見が見れるように petari を使いまとめて用意をした (図 4)。

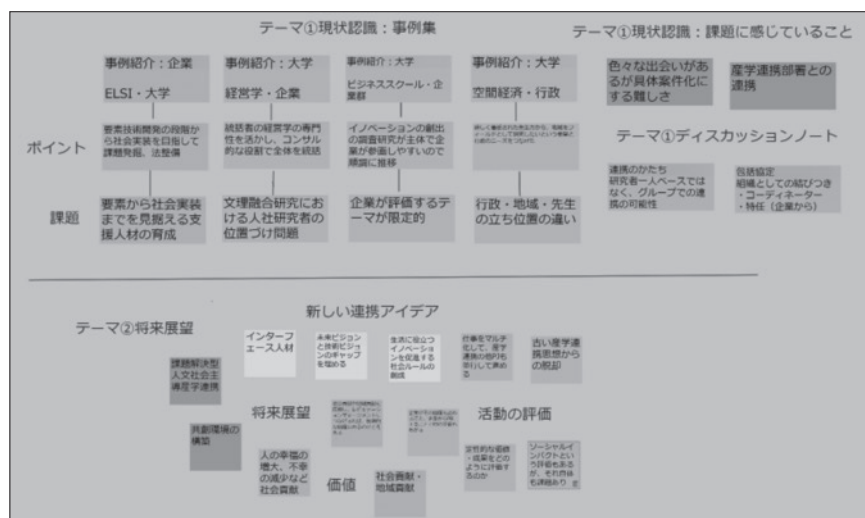


图 4

当日は大学の研究推進関係部署からの参加者が数名、そして企業の研究開発部署からの参加者が1名という顔ぶれとなった。

テーマ①に基づき、最初に事例的な紹介からワークショップが始まった。登壇者の南先生を除き、当初の想定通り、参加者自身が人文社会系主導産官学連携プロジェクトに関わったという事例は少ないことが明らかになった。紹介された数少ない事例の中で、イノベーション創出調査研究として、商学部所属の研究者が、そのテーマに興味を持つ複数の企業と協働で調査業務を行ったという事例が最初に紹介された。会社のイノベーション創出に資する知識やその調査体験の共有化ということで、企業にとってはメリットが多く魅力的なものであった。その他には、JST RISTEX 申請にあたり、ある企業のシーズを経営学の研究者がコンサルティング的な立ち位置から実用化を目指していくという事例も紹介された。また、コンサルティング的な要素は人文社会系研究者の強みであり、学際的研究を進めるのには向いているのではないかという意見も述べた。

その一方、企業からの意見として、例えば ELSI (Ethical, Legal, Social Issues) 的研究のニーズは現在高まっているものの、大企業の場合と中小企業の場合とでは大学へ求めていることが異なっているというものもあった。大企業ではすでにレギュレーションを定める本部があり、かなり丁寧にレポートを作成して念入りの検討がされているという現状があり、研究者一人の共同研究であるとそのレベルに達することは難しいという意見があった。同じことがデータサイエンス分野にも言え、技術開発をしている大企業では大学にデータ解析を頼むということはせずに自前で完結できるということを踏まえ、産学連携一律のアプローチではなく工夫することが必要であるという企業側視点での見解も補足された。

その他にも、組織の建付けという意味から産学連携部署との協働や棲み分けについても意見交換がされた。人文社会系担当 URA の立場としては内部から学術研究支援をするということが期待されているが、産学連携についてはお金を取ってきてなんぼというところにあり、認識のギャップがあるということが話し合われた。企業側の意見として、一人の研究者との契約ではなく、組織的にチーム型の研究者を大学として紹介していただき連携していきたいというのがでた。それにたいして、JST のファンドを利用したオープンイノベーション組織が大学にあり、各グループにコーディネーター的な人材がいる大学や、包括協定を利用しコーディネーターを大学内に配置したり、企業とのクロスアポイントメント制度を使って人材を流動させたりしているという事例の紹介があった。

次に、テーマ②人文社会系産官学連携の将来展望、活動の評価、人文社会系の産官学連携の価値等について議論された。企業としては、これからの技術開発をするなかで基礎・基盤要素技術の開発の時点からの連携が必要であり、その段階での連携を希望するという意見がでた。それに対して、ムーンショット採択課題を出した大学からは、10年後20年後の先に実現する技術を構成するうえで、その開発の最初の段階から社会科学の研究者に入ってもらおうという提案内容であったという紹介があった。その他にも「人間中心 AI 社会」のような経済産業省、内閣府等で言われていることがあるが、その中で例えば哲学で

いう人間性という話になったときに、技術者は自分が本を読むように理解していれば良いという見解がある。しかし、共創のプラットフォームをつくるには、それに参画するメンバーの認識合わせをすることが大切だと考えるという意見もあった。

産学連携には特に経済的アウトカムが期待されており、コストパフォーマンスで短絡的に評価されることもあるなかで、URAとして人文社会系主導にどういった価値を見出し、そして評価する側はどういった評価をすべきであるかというジレンマがある。登壇者の南先生からは、従来の「技術開発から事業化」という産官学連携のフレームワークで見るのではなく、人文社会系が得意とするその前段階の「テーマ探索」や調査マーケティング、企業の取締役などの価値判断等を連携モデルとして評価するべきであるという話があった。また、日本が失敗している価値やノウハウの価格設定、大学で蓄積された知見の付加価値が設けられていないことに対する課題意識が共有された。

グループ 6

リーダー：

稲石奈津子（京都大学 学術研究支援室（KURA）シニアリサーチ・アドミニストレーター）

サブリーダー：

加藤 真樹（北海道大学 大学力強化推進本部 研究推進ハブ URAステーション 主任 URA）

発表内容

グループ6から、「課題解決プロジェクトの成功には、人社系が必要か」が課題となり、このテーマでディスカッションを進めました。

我々は事前に Google Jamboard で情報共有して、いくつかのトピックに関してグループメンバーに付箋で意見をいただくような形にしました（図5）。最初にこの「課題解決プロジェクトの成功に人社系が必要か」というテーマでお伺いしたところ、堂目先生から非常に深いコメントをいただきましたので、我々のグループ名はちょっと格好いい系で「探究」にしました。このトピック1に関しては、今回のフォーラム参加者は必要だと思って集まっている

と思いますので、あえて共有だけで議論はしませんでした。トピック2の「どのような課題に人社系が必要とされているか」では、具体的な課題を上げていったのと、トピック3「課題解決に必要な研究領域は何か」ではその課題に関してどの人社系の研究分野が紐づいていくのかということについて意見をいただきました。なぜこのような進め方をしたかということについて意見をいただきました。なぜこのような進め方をしたかということについて意見をいただきました。なぜこのような進め方をしたかということについて意見をいただきました。

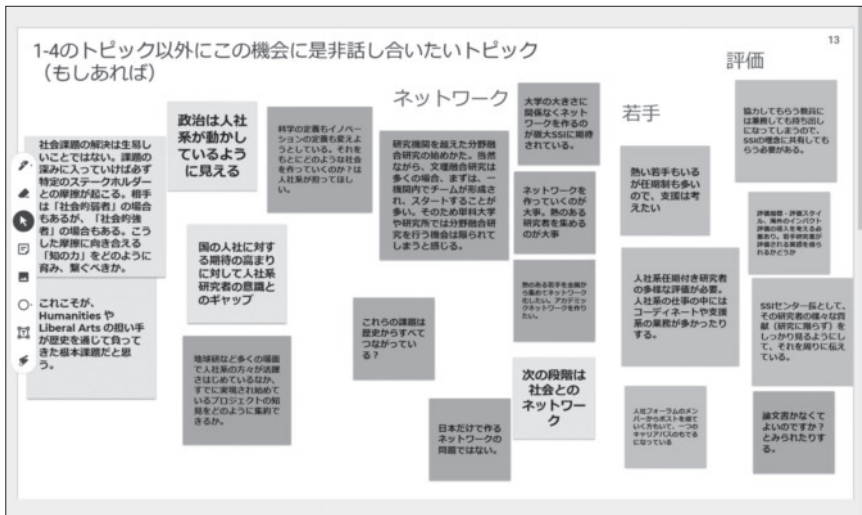


図5

このチームで具体的に話し合ったのは、4番目の「課題解決プロジェクトの成功に必要な要素は何か」というトピックです。これについてのコメントを傾向別に並べ変えてみたのですが、まず一つはPIですね。どのような人が選ばれるのか、そしてその代表の方が明確なビジョン、リーダーシップをとることの必要性。ビジョンの共有や理念の共有、ここが成功にとっては非常に重要なのではないかという意見が多かったです。次にコミュニケーションですね。異なる分野の研究者や、さまざまなステークホルダーが関わっていくので、その

調整が成功要素として非常に重要です。あとはやっぱり組織、体制ですね。課題解決を目的とした持続的な組織が必要なのではないか。プロジェクトだけで終わってしまうのではなくて、継続的にその問題に取り組んでいく、しかも理念とゴールを反映した組織の形成が、成功には必要なのではないかというご意見がありました。そして、最後に評価の問題です。やったことを評価する制度がないと続いていかないのではないかというご意見も出ています。

成功に必要な要素は、これでまとめることができたのですが、グループ6はいろいろな方が参加してくださっていることもあり、せっかくなので、事前に挙げたトピック以外に話し合いたいことを出し合ってディスカッションを行いました。実は時間の大半をここに費やしています。このグループの方々が、どのような問題意識、課題意識を人社の学際に関して持っているかということで意見をお伺いしました。例えば政策との絡みでの問題や、ステークホルダーとの問題など、いろいろ摩擦が起こったときに、人社系の知恵を使ってどのようにそれを解決するかという問題です。単科大学で人社系しかないところが理系と組んでいくには、プラットフォームになるシステムが必要ではないか、人社系に対する社会的要請や政治的要請に対する人社系研究者のモチベーションが上がっていかないのをどうしたらいいのかといった内容です。堂目先生いわく、「これらの課題は昔から全てつながっていて、ばらばらにあるのではなくて、一つの問題なのだ」とのことです。

その後いろいろ話し合った内容をまとめると、大きく分けてネットワークが重要だということと、やはり中心にあるのは、熱意や理念ではないかということです。熱意のある人がいて、その人たちでどうやってネットワークを組むのか、チームを結成していくのかという話が出ました。また、10年後、20年後引っぱり張っていつてくれるような熱意のある若手研究者の方にどのように入ってもらおうかといった点があります。若手の人がせっかくやってくれても、こういった仕事は研究者としてよりも、コーディネートの仕事のようなものも非常に多く、研究分野ではなかなか評価されないので、ここでも評価の問題というのが挙がってきます。こういった人たちを評価していけるシステム、海外の事例で言うインパクト評価のようなものがないとなかなか評価されにくいのでは

ないか。ということで、大きくはネットワークと若手と評価にテーマが大別されると思いました。

熱意のある人が一生懸命やっても、なかなか評価されないような状況だと、やりがい搾取になりかねない。そうならないようにきちんと評価されていく体制ですとか、こういった取り組みも研究者が評価される対象なのだと理解されるような仕組みづくりも、一方で必要ではないかという話が出ました。他にもおもしろい話が出たので、ディスカッションの概要を参照していただければと思います。

(発表者：稲石)

【ディスカッションの概要】

今回のディスカッションに際して1から4のトピックを立て、Google の Jamboard 機能を使って事前にグループメンバー内で意見を共有した。当日は特にトピック4と、事前に立てた四つのトピック以外に話したいテーマ、今課題だと感じていることを挙げて貰い、ディスカッションを行った。以下は各トピックについて出された意見。

トピック1：課題解決型プロジェクト（の成功）に人社系が必要（不必要）な理由

- 理系研究者は社会課題の専門家ではないので、社会のニーズを把握し社会実装するには人社系が必要では？一方で、人社系の素養のある理系研究者がいたら人社系研究者の参画は必要ない？（ひとり文理融合）
- どのような社会を目指すべきか、社会の「ニーズ」とされていることは本当に必要なことかを考える上で、「人間とは何か」、「社会とは何のためにあるか」を考え続けることは不可欠。このことを世の中の多様な人々、特に不利な状況の中にある人々に寄り添い、共感し、どうすればよいかを共に考えることが必要。
- 現在直面している課題は社会的な課題が多く、技術の発達だけで解決できるものでもない。技術を中心とする場合でも、その技術を応用する地域と

の関わり、経済的なバランス、社会システムとしての問題、開発の進行による悪影響なども考慮しなければ、かえって新たな課題を生む可能性がある。プロジェクトを成功に導くためには、多角的に課題を検討した上で推進する必要がある、その点で人社系研究も欠くべからざるものではないか。

- プロジェクトの社会的影響（ELSI）について検討するため。
- プロジェクトが関わる価値について検討するため。
- 社会的ニーズに対応する新しい技術が開発されても、それが受け入れられてゆく過程において人文・社会科学の知見が必要となる。また、なぜその問題が課題として認識されているのか、歴史的経緯や人類学・社会学的考察なしには、誤った解決策を導き出すことすらあり得る。

トピック 2：どのような課題に人社系が必要とされるか

- 少子高齢化社会、貧困、格差社会
- 環境問題
- 人口減少時代の都市の在り方（交通、住居、コミュニティの在り方等）
- ELSI（科学技術における倫理的・法的・社会的課題）
- Society 5.0 のような社会を変容させる可能性のある課題。
- 課題の原因が人間にあり、人間生活に関わるものである以上、すべての課題に人文学、社会科学の知見が必要である。すべての生命がつながっていることを考えるならば、人間以外の生命に関わる課題についても同様である。
- 医療福祉等、生命倫理に係る課題
- 社会的マイノリティへの差別問題

トピック 3：課題解決に必要な研究領域は何か（人社系+○○+□□）

- 開発途上国等における衛生、医療上の課題→工学、医学、衛生学+解決策が受け入れられるかを検証する地域研究、人類学、社会学、（行動）経済学等
- ポストコロナ社会→文系・理系、殆ど全ての領域が必要？文系で言えば哲学なども。

- 環境問題：社会学・心理学・経済学・生態学・工学
- すべて。私の専門は、経済学の歴史ですが、時代に向き合い、泥にまみれながら学説を打ち立ててきた学者の生き様を研究したことが、大阪大学 SSI 設立につながった。

トピック 4：課題解決型プロジェクトの成功に必要な要素は何か

- 建設的な意見を出し、対話できる研究者・支援者の人選
- PI による明確なビジョンの提示とリーダーシップ
- ビジョンの共有
- みんなが共有でき、立ち返ることができる理念。大阪大学 SSI では、「命」
- 失敗の原因になる要素として「手段と目的の転倒」があると思う。資金獲得や産学連携は手段であって目的ではないにも関わらず、数値目標を立てて活動しているうちに本来の目的を忘れてしまう。理念を失えば、組織として存続しても存在意義はなくなる。
- 異分野の研究者間のコミュニケーション
- ステークホルダー間の調整
- 理念にむすびついたゴール（目指すべき社会）
- 課題解決を研究の目的とした恒常的な拠点の形成＝継続的・総合的な課題の追求
- 持続可能な体制の構築
- 理念とゴールを反映した組織の形成
- 多様な評価軸

1-4 のトピック以外にこの機会に是非話したいトピック、課題と感じていること

- 社会課題の解決は生易しいことではない。課題の深みに入っていけば必ず特定のステークホルダーとの摩擦が起こる。相手は「社会的弱者」の場合もあるが、「社会的強者」の場合もある。こうした摩擦に向き合える「知

の力」をどのように育み、繋ぐべきか。それこそが、Humanities や Liberal Arts の担い手が歴史を通じて負ってきた根本課題だと思う。

- 政治は人社系が動かしているように見える。
- 国の人社に対する期待の高まりに対して人社系研究者の意識とのギャップ
- 地球研など多くの場面で人社系の方々が活躍は始めているなか、すでに実現され始めているプロジェクトの知見をどのように集約できるか。
- 科学の定義もイノベーションの定義も変わろうとしている中、どのような社会を作っていくのかを人社系が担ってほしい。

他、テーマ的な傾向を大きくまとめると、「ネットワーク」「若手」「評価」に関する課題が話し合われた。こちらは発表内容の方に議論をまとめたので、ご参照いただきたい。

グループ7

リーダー：

鈴木 環（京都大学 学術研究支援室（KURA） 主任 URA）

サブリーダー：

小木 雅世（北海道大学 大学力強化推進本部 研究推進ハブ URA ステーション URA）

発表内容

グループ7では、「国際的な地域の課題解決を目指すプロジェクトに人文・社会科学の専門性が必要か？」というテーマを設定しました。メンバーは国際協力・国際協働プロジェクトの経験がある方や実際に関わっている専門家、研究者、URA が中心です。

事前に付箋ツール Miro を使って、シート上で「事業実施者や資金提供者」、「課題解決を担う研究者・技術者」、「支援される側（相手国）の人々」の立場を想定し、それぞれ人社系の専門性が「必要とされる場合」と「必要とされない場合」についてメンバーが意見を記入しました（図6）。その意見を元にグループワークでは現状の課題整理を行い、どうしたら人文・社会科学の専

[illegible]

图 6

門性が国際的な課題を先導できるのかについて議論しました。グループワークの結論は、以下の通りです。

〈事業実施者や資金提供者〉

- ・ 企画をする段階、あるいは予算設計の段階も含めて、人社系研究者が参加できる方がよいのではないか。
- ・ 特に技術系の専門家ばかりが企画に参画しがちな傾向にあるなかで、人社系の専門家が計画段階から参画することが重要。

〈課題解決を担う研究者・技術者〉

- ・ 人社系が専門でもいろいろな専門性に精通している人であれば、連携することでプロジェクト全体も良い方向に進むけれども、一方で全く技術を理解しないで空想で話す文系の人が阻害要因となりプロジェクト全体がうまく回らなくなってしまう、あるいは説明・理解に時間がかかる場合もある。
- ・ 必ずしも人社系の「専門家」が参画すべきかということが問題ではなく、文系でも理系でも、相互の専門性を理解した人材が参画することが重要なのではないか。

〈支援される側（相手国）の人々〉

- ・ 事業を実施される側、つまり受益する当事者側が課題だと理解していないまま支援が実施されがちである。
- ・ 人社系・理系という異なる専門性、相互の専門性だけでなく、社会の制度や人々の心など、様々なステークホルダーについて理解し、説明や調整をしてゆく能力を有していくということが必要なのではないか。

〈補足〉（寺野：JICA）

- ・ 専門家を配置し、資金の配分もでき、事業の方向性を決定できる立場にある計画者がマクロな視点での専門性を持つ必要がある。長期的・持続的な視野でいろいろなステークホルダーの受益等を考え、そのための幅広い専門的視点を持つことができると、現場の専門家はそれぞれの専門性を生かして、一つの設定されたプロジェクトのゴールに向かうことが可能だろう。

（発表者：鈴木）

【ディスカッションの概要】

はじめに、事業実務者や資金提供者の立場として、人社系が必要とされているときについて、寺野（JICA）からは、「JICA のプロジェクト全体として、科学技術方面、理科系の方に重きが置かれ、お金の配分が偏る事実はある。専門の人を入れても偏りがあり、どういう知識やスキルが結果を出すのに重要なのか、さらに結果に結びついているのだろうかと思う」という意見が寄せられた。また、岡田（東京大学）からは、「JICA や政府関係者などプロジェクトを採用する側からは、技術導入によるアウトカムが期待できないと、その技術自体がすばらしくてもお金はつけられないという話を聞いた。新しい技術を導入する、作るという所だけでお金をつけるのは難しい。それを社会に実装したときに、どれだけの価値が生まれるかを検証するのは、社会や制度、文化を知る人社系の専門家の役割ではないかと考える。社会課題に関わるプロジェクトに出資する企業の経営者には文系の人が多いので、技術そのものの面白さではなく、それによってどうなるかをより重視するのではないかという印象を持つ」という意見があった。

次に、課題解決を担う研究者・技術者にとって（実施段階）の立場として、人社系が必要とされているとき、寺野からは、「現地で大学を作るプロジェクトに携わったときに感じたことですが、プロジェクトは JICA の上部が決めたことを現場でどのように活動するかを判断しなければならないことが多い。同プロジェクトでは工学、ビジネス、哲学、語学など、日本のさまざまな分野の先生方が関わっているが、それぞれの分野の強みをどのように繋げるかということを経合的に判断することが必要。そのためには、さまざまな分野でもお互い話がわかるようにしたり、アイデアをつなげるなどの工夫が JICA 上部と現場ともに必要だと思う」という意見が寄せられた。また、人社系が必要とされていないときは、岡田は、「課題解決のための技術を開発する段階で、人社系の研究者が入ったときに、技術開発において邪魔になるという話を聞いたことがある。実際に、当該技術に関係する基礎的知識を全く持たない人社系の人々が、全体から見たら些末で技術者にとっては当たり前の事項を質問してきたり、技術的裏付けのない突飛なアイデアをぶつけてきたりすることがあっ

て、そのたびに一から説明しなければならず、時間がかかってしょうがないということを、ビジネスやベンチャーを立ち上げた方が言っていたことがあった。しかし、それは専門家の社会科学や人文系の研究者が邪魔ということではなく、素人として技術を理解しないまま関わろうとする、技術の専門ではない人として邪魔になるだけで、人社系の人だから邪魔になるというわけではない」という意見が寄せられた。

ここで、人社系と理系の方々のギャップをどのように埋めていくかというところが、課題解決を担う研究者・技術者にとって、また実施段階において考えるべき課題として提示された。

次に、支援される側（相手国）の人々にとって（受益）の立場として、荒木（広島大学）は、「エボラ出血熱の件で、現地では病気に対する理解がないまま支援されているときに、どうしてやらなければならないかを理解できないので、支援をする側と支援を受ける側でコンフリクトが起こっていたと聞いた。この部分で問題が起これと思う。このときに、現地のことがわかっている人社系の方が説明することや、現地の文化を知っている方が対応したらよいと思う」という意見が挙げられた。

また、田中（東京都立大学）からは、「対外的な活動の際に研究の成果や必要性がわかりやすく説明できるように、その地域の人や相手の国の人にわかりやすく説明できるという点では、人社系の先生が活躍してもらえないかと思う」という意見が寄せられた。

ここで、人社系の方が、幅広い横断領域のことや現地の事情など、あるいは日本の政府決定やお金を出す側の事業などわかっていると、説明をうまくできるのではないかという認識が得られた。

最後に、どうしたら人文・社会科学の専門性が国際的な課題解決のためのプロジェクトを先導できるのかという議論をした。寺野からは、「大きな分野間で世界的な持続可能な課題や、総合的に理解するというマクロな視点や専門性をインプットして政策や財政分配をすることかと思う。長期的な視点で課題解決を考えると、専門性が偏っているとなかなか難しい。つまり、幅広い専門性、それを理解した上で、政策や意思決定に、最初に事業のフレームワークを

作る人にインプットしていくということが重要である。例えば、専門性の高い人と実績ある専門家が共同して、マクロな視点で物事を判断してお金の配分を決めたり、目的のために人選して派遣できる決定権を担うのが重要ではないか」という意見が寄せられた。また、岡田からは、「メリットや利益がなければ国や企業はお金を出さない。単に技術が優れているということだけではなく、社会にどのように還元されるのか合理的に説明しようとする、社会や制度、人の心が関わってくるので、そういうことを研究している人社系の研究者がプロジェクトを作ると、成功率が上がると思うし、その方が採択されやすい計画書を書けると思う」と意見を述べた。

つまり、文系、理系だけではなく、ステークホルダーも含めて広く理解しあうことが必要であり、ここがうまくいけば、実際にやっていくときもうまくつながっていくのではないかとということが共通理解となった。

次に、理系の立場から、人社系の人にどのように参画してくれたらよいかを考えた場合、日江井（JST）は、「AMED で、JICA との共同プロジェクトに関係しており、理系の基礎研究フェーズで行う国際共同研究だけでは捉えきれない状況を経験した。現地の研究者と日本の研究者が共同でやっていた所を見てきたが、日本の研究者が現地の状況にも通じているので、必ずしも現地の法律や経済、社会学などの研究者と一緒にやる必要がなかった。また、会社の立場で考えたとき、単に技術がいいからということでお金を出すわけではない。研究者や技術者として、どう社会に役に立っているかでも判断していると理系の立場から考えている」と意見を寄せた。

さらに、寺野は、「高等教育案件の場合は、受益者は教授や研究者になるのですが、自分たちの専門性が長けているけれども、他の専門の人たちのことはあまり知らないし、興味もないという人が多い。しかし、多様な専門性を活かすことはとても大切なため、特定の専門以外の人にも興味をもってもらえるように話をするということが重要である。たとえば、複合的な専門性を活かしたような大学の発展の仕方や、マルチ・ディシプリナリーな教育の研究のやり方の魅力をいろいろな人の専門性の言語で話せる人を入れると、皆さんに興味や関心を持ってもらい、専門性をうまくいかせるようなツールになるのかと思

う」という意見が寄せられた。

最後に鈴木から、これらの意見を受けて、プロジェクトを進めてゆく上で、参加者が自身の専門以外の人にもわかりやすく伝え、またお互いの専門性を理解しあうことが重要であるだろうと添え、グループディスカッションを終了した。

グループ 8

リーダー：

丸山 浩平（早稲田大学 研究戦略センター 教授）

サブリーダー：

植村 妙菜（北海道大学 国際連携機構 国際 URA）

発表内容

（丸山）我々のグループは「課題解決プロジェクトに人社系は必要か」という主題に対して、時間の兼ね合いもあって、「人社系の参画は必要です」という前提で議論に取り組みました。

グループメンバーには、研究者が 2 名、URA が 4 名、学生が 1 名参加しました。研究者では、基調講演の先生が入られて、議論の中で随時、貴重な意見をいろいろいただきました。URA の中には、学際研究プロジェクトである科研費「学術変革領域研究」の申請を企画、主導した方がいたので、具体事例をもとにした議論ができました。学生に関しては、課題解決型プロジェクトに対して人社系の研究者はどのように熟達すべきか、研究者や支援者のスキルアップを、まさに修士論文のテーマで取り組んでいる方がいました。そのこともあって、我々のグループも研究者や支援者の熟達に焦点を絞って議論することとしました。彼はこれから修士論文を書いていくと思いますので、折角の機会ですので発表していただくことにしたいと思います。（発表する学生に対して）よろしくお願いします。

（学生参加者）ご紹介ありがとうございます。どういう場か余り考えずに来たら、学生が僕しかいなかったという感じで、すごく緊張して参加させていただ

いておりますが、とてもおもしろくやらせてもらいました。

先ほどご紹介いただいたとおり、チームでは人社系が関わる共同研究における研究者の熟達という、社会的課題解決に人社系は必要という前提で話を進めて参りました。キーワードとして、「空中分解」という言葉がすごくわかりやすいなと思いました。何か一緒にやろうとしたときに失敗するのが空中分解だとすると、それがなくなるようにしていくのが基本的には熟達、上手になっていくことだろうという前提で、じゃあ何が原因になっているのかを考え、その原因をどう取り除くことが可能なのかというような話を進めました。

原因候補は三つあって、一つが「言葉や方法論のずれ」、次が「共通の利益やゴールを獲得できないというずれ」、三つ目が「熱意やコミット感のずれ」です。それぞれのずれをどのように取り除くかという点、順に話していきますと、「言葉や方法論のずれ」については、カジュアルかつ高頻度の集まり、プレストをして、自分がどんな関心を持っているのか、どういうことをやっているのかという、異分野の方でも理解できる専門の説明と、相手のそれを知っていくという工程を先ず辿ることが必要だということです。それを通して、あるいは URA などの支援者が準備してもよいのかと思いますが、例えば政治学と社会学の考え方の違い等も、詳しくは意外と誰もわからない状態なので、しっかりと説明、理解し合うことが重要とのことでした。

あとは、研究者アイデンティティの問題です。先ほど他の方も発表されていたと思いますが、一流になって自分のやり方が確立されてくると、いかに自分のアイデンティティを揺るがせながら関われるか、ある種の開放性みたいなものが重要となります。そういうマインドを持てるよう URA はどのように介入していけるのか、というスキルアップがあると思います。

「共通の利益、ゴールのずれ」に関しては、人社系研究者はやはりラボ文化がない分、テーマを他者と連携していくことに対する経験がないため、「人とは何か」というような、緩いレベルで据えた方が協働しやすいと思われます。ファンディング機関が関わる場合も、そのファンディング機関とも共通の利益や考え方を構築することは難しく、熟達すべき要素だと思います。共通の関心を見出す能力、自分のことを話す力、自分のやっていることを説明する力と、

相手が言っていることを理解しようとする力、態度とかというものも共通の利益を見出すために重要になってくるわけです。

最後の「熱意、コミットのずれ」では、他のチームの方々もおっしゃっていて、トップダウン的な研究者から始める場合と、URA が声をかける場合によっても、プロセスにおけるコミット量の調整や、誰をリーダーにしてやっていくのか等の難しさが生じます。チーム組成のずれ、それに伴ってずれる熱意のずれみたいなものと、先ほどの研究者アイデンティティの柔軟さみたいな話も複雑に絡みます。若手研究者がどんどん関わっていくことは良いことであるものの、若手研究者のインセンティブとしては、やはりアカデミアのキャリア、コストをちゃんと持てるかどうかという点が非常にバイタルな、重要な点です。現行人事制度は、一つ分野で卓越し、きちんと業績を出すことが求められていますので、その状態を変えていけるのかということになります。これは熟達というよりは、制度の話かもしれませんが、熱意やコミットが明確に関わってくるという形で、整理させていただきました。

以上となります。チームの他のメンバーの方々からも、ぜひ補足等あればお願いいたします。ありがとうございました。

(丸山) 補足はございません。以上、グループ8の発表でした。

【ディスカッションの概要】

参加者にはいずれも文理融合、もしくは文系に関わり合いの深いメンバーが揃っており、教員、URA だけではなく学生も入っているという特徴があった。まず「課題解決型プロジェクト（の成功）に人社系は必要か」という主題は、短時間の議論を有効なものとするため、「当然、人社系の参加は必要」と見做すこととした。その上で、議論ポイントを学生の修士論文テーマに揃えるべく、「人文・社会科学が関わる共同研究における研究者の熟達」とし、課題解決型プロジェクトを上手く進めるために、研究者や支援者の経験が必要である点を特に議論することとした。

課題解決型プロジェクト等の学際研究を進める際の困難として、1.) 分野ご

との言葉、言語文化の違い、2.) 若手研究者へのインセンティブの少なさ、
3.) 空中分解の可能性がある。

- 1.) 分野ごとの言葉、言語文化の違いについては、研究者、支援者の熟達として、北海道大学准教授より、URA が各人社系分野の見取り図を描き、ディスカッションを呼び込み交流を繋ぐことになるという意見が、また、URA より、言語の違いを仲立ちできるようなミーティングや懇親会を開催することで、同学と福島医科大学での外部資金申請に至った経験が紹介された。
- 2.) 若手研究者へのインセンティブの少なさについて、キャリア形成を考える上で、キャリアの初めは広く浅くということが行い難いが、ある程度研究者としての熟達が進むと、狭く深く行うようになり、ジャーナルがないために評価はされなくとも大海を開拓することへの意味を感じるようになること、「学際研究における 10 の tips」では、シニア研究者は、博士研究員・博士学生を学際分野へ挑戦するよう支援すべしという教訓があること、学術コミュニティ全体で、学際領域に挑戦することを認める環境、人文学と自然科学の間の言語的・文化的差異を認めること、その認めるという行為が、実はとても面白く挑戦的であり、新たなコンセプト、考え方、アプローチを学ぶ機会であると感じられるかどうかが大変という話があった。
- 3.) 空中分解の可能性について、空中分解が起きる要因としては、参画者各々が結局自分の土俵から出ようとしないと、ばらばらとなりがちに思われること、また、共同研究における各人の温度感コントロールやリーダー設定の重要性が上げられた。特に、価値観を統一できるかどうかは、リーダーを誰にするか、参画者間での密なミーティングができるかに依り、また、外部資金機関が気にする点である。なお、リーダーの特性としては、牽引タイプと調整タイプがあり、後者の場合、メンバーの温度感が高い状態に保たれるようには思われるが、未だ学術的に分析できていないとの発言があった。外部資金機関のプロジェクトによってもリーダーの求め、価値観統一の必要性は変わることで、人社系研究者同士でもお互いの分野の内容を

知らないということが往々にして起きるので、プロジェクトのテーマ、目的を絞り込まない方が、研究者たちが参画し易いことが続けられた。また、医学という分野内でも同様のことは起きるため、同じ大分野でも、異分野でも伝わる表現方法ということがあると述べられた。

共同研究におけるバリエーションでは、自分のアイデンティティを多少失ってでも新たな知見を生み出すパターンと、自分のアイデンティティを保持したまま土俵を出ないパターンが提示され、また、そもそも学際研究とは、研究者にとってのアイデンティティの危機であり、その恐怖にひるまずに進める勇気が必要となることも示された。人社系の中でも経済学は分野内の縄張り意識が強く、他分野と組み合わせることが自陣での勢力拡大に繋がるという考えにより、学際研究を進めるケースがあることも述べられた。

学際研究プロジェクトチームの空中分解は起き得るが、研究者及び支援者の熟達をもって解決できる可能性があるという大凡の共通認識を得た。また、事前のメールでの議論に留まらず、同フォーラム終了後も、情報交換の場としてグループメールが機能していることを述べておきたい。

グループ9

リーダー：

矢吹 命大（横浜国立大学 大学戦略情報分析室 准教授／研究推進機構 URA）

サブリーダー：

岡田 直資（北海道大学 大学力強化推進本部 研究推進ハブ URA ステーション 主任 URA）

発表内容

（矢吹）このグループはメンバーが研究力分析に関わっているというところで揃っているのですが、それに限らず、URA としてそれぞれ様々なポジションに関わったバックグラウンドもふまえて、議論いただきました。

議論の中で、課題解決型プロジェクトに人社系は不要であるということも考えてみようかとチャレンジしてみたのですが、結果としてはそのような突飛な

結論には行きつきませんでした。

具体的な内容については、人間文化研究機構の押海さんにご紹介いただきたいと思います。押海さん、お願いします。

（押海圭一：人間文化研究機構 機構長室 特任助教）ありがとうございます。今回の議論では論点を三つに分けました。

まず、論点①は、課題解決型プロジェクトにおける課題とは「研究課題」なのか、「社会課題」なのかという点です。これについては、「社会課題」であるということは、私たちの間で合意できました。ただ、課題解決型プロジェクトを実施することで、学術的な課題の発展もあるのではないかと、という点も一つの重要な意見として出ました。

次に、論点②として、逆に、人社系が不要な課題解決型プロジェクトとは何かということを思考実験的に考えてみました。具体例はなかなか出なかったのですが、これはまた改めて考えてみるのも面白いテーマだと思います。また、ここでは、人社系はプロジェクトの最初から必要かどうかという問題も提起されましたが、人社系はどこかの段階で必要になるだろうという意見がほとんどでした。先ほどの京都大学の方の発表でもありましたが、最初から人社系が関わった場合、議論が少し発散する可能性があるだろうということも話されました。

最後に、論点③として、人社系はどのような課題解決に対して、どのような役割を担いうるかを議論していたところで時間が来ました。まだ余りまとまっていないのですが、理系とは時間軸が少し異なるというのが一つ重要な点であろうと思います。また、人文系は“価値”を扱う学問であるという点が非常に重要だということは、私たちの中で合意できたのではないかなと思います。（矢吹）ありがとうございます。ちょっと時間切れ感があって、着地し切れなかったのですが、こういった形で少し議論をまとめさせていただいたところです。

【ディスカッションの概要】

本グループでは、まず事前にグループワークのテーマ「課題解決型プロジェクト（の成功）に人社系は必要か」について、参加者がメールで意見を表明し

論点①は「『課題解決型プロジェクト』とはなにか？」であり、議論にあたっての各人の認識を共有した(図7)。



次に、『課題』を解決する主体は誰なのか? という問いに対しては、どの参加者も、研究者だけでなく、実務家、行政、一般市民も含むという意見であった。議

論の中で、「研究者が入ると、課題解決にスピード感がなくなるのではないか」という意見や、「企業で課題解決型プロジェクトを実施する際には、研究者を参画させない場合が多いのではないか。しかし、大学・研究機関が実施する場合には、やはり研究のピースも含めて実施しようとしていると思う」という指摘があった。

論点②は「人社系が不要な課題解決型プロジェクトとは何か？」であった。これは、逆の例を考えることで、人社系の必要性が見えるのではないかという趣旨であった。「実際に課題解決型プロジェクトは人社系以外の研究者が取り組んでいるのか？」「人社系研究者の参画が成功に寄与しない、むしろ失敗を導くケースとはどのようなものか？」という問いについて議論した（図 8）。

論点②人社系が不要な課題解決型プロジェクトとは何か？

1) 「人社系は必要か？」と問うならば、課題解決型プロジェクトは人社系以外が取り組んでいるものか？
 2) 「人社系」が不要な課題解決型プロジェクトとはどのようなものか？
 →「人社系」の参画が成功に寄与しない、むしろ失敗を導くケースはどのようなものか？

社会課題の解決には、研究者である方実務家である方に限らず、その「社会」に関わっている人の参画が必要であり、そこには人社系が必要ではないかと考えます。

不勉強なのですが、例えば、COIにおける人社系研究者が関与されているケースはどのくらいあるのでしょうか

特定のディシプリンでのみ利用される方法論の開発とか？

医療系の課題解決であれば多くは人社系が入らない方がよまとまると思われます。ただし、健康寿命延伸などテーマとなると意味になると思われます。

純粋に科学課題の解決を理系だけで進めつつも、社会実装には、社会を対象とした研究者が必要だと（私個人的には）感じています。

多くの社会課題解決型プロジェクトは、どこかの段階で人社系が必要になることが多いと考えられる（自動運転の実用化、途上国の水資源の改善など）。

最終的には必要だと思います。が、段階として、例えば、初期の概念開発を免けた発想をしたい時には外れていてもらう？

資料出典：社会科学研究推進センターワークショップグループ「テーマ「課題解決型プロジェクト（40周年）」に必要か？」

図 8

まず、事前のメールでの「実務家との協力で十分ではないか」という意見を受けて、「プロジェクトで得た知見を実際に実装してあまねく広く使える形にするためには、抽象化・一般化する必要があり、そこにはやはり研究者の学術的な部分が必要ではないか」という意見が出た。

次に、プロジェクトのステージによる人社系研究者の必要性について議論した。「自動運転の初期の技術は理系で開発されるが、実装には人社系研究者が入ってくる余地がある」「自由な発想を促すときは、ある程度、実装時の法律

等を考えない段階も必要ではないか」など、初期段階では人社系研究者が入らない部分もあるかもしれないという意見があった。一方、「講演で言及されたように、最初から人社系研究者がいないと後で困る場合もあり、ケースによるのでは」という指摘もあり、意見が分かれた。また、「医療系の課題解決には人社系研究者が入らない方がまとまるのではないか」という意見もあった。

さらに、人社系研究のスピード感と課題解決の関係について議論が続いた。「人社系のスピード感は少しゆっくりである。コロナウイルス流行のような、科学的にも不確実性が大きい喫緊の課題の最初期には向かないのかもしれない」という意見に対し、「都市のロックダウンや移動制限を検討する際に、人の命の重要性を考える時点で理系だけの問題ではない。緊急事態における対応においても、歴史的な事実から情報提供や示唆ができるので、人社系も最初期から関わったほうが良い」という意見があった。

加えて、「実際に（実務家ではなく）人社系研究者が加わることでプロジェクトが成功した事例にはどのようなものがあるのか」という疑問に対し、琉球大学の「水の環でつなげる南の島のくらしプロジェクト」の紹介があった。このプロジェクトは当初は理系研究者のみで実施していたが、実際に水をきれいにしてゆくためには、地元の人と一緒に、彼らの理解を得つつ進めてゆく必要があり、もともと地元の人と協力して活動していた法学、人文学、人類学の研究者が加わっていった、という経緯が紹介された。

論点③は「人社系はどのような課題解決に対して、どのような役割を担いうるか？」であったが、参加者がオンラインホワイトボードに意見を記載したところで終了時間となり、議論はできなかった（図9）。

最後は時間切れとなってしまったが、全体を通して、人社系研究の課題解決型プロジェクトへの関わりを、事例を交えつつ具体性をもって議論することができた。

論点③ 人社系はどのような課題解決に対して、どのような役割を担うのか？

- 1) 人文・社会科学の学問的知見が必要となる課題とは何か？
- 2) 人文・社会科学が学問として果たす役割は何か？
- 3) 人文・社会科学との共働により生じる価値・利点とは何か？

・人社系が課題解決に寄与する側面：人社系の研究がもたらす「技術」が貢献する？→課題を解決するフェーズで

1) 学問的知見はほとんどの社会課題において必要になると考えます。
2) 人文系は価値を創造・提供する学問であると最近感じます。社会科学はもう少し活用しやすいスキルを多く提供できる学問であると感じます

1) 例えば、環境に排出されるCO2を減らすという課題で経済によるプロジェクトではリサイクル技術の開発となるのが、人社系が入ると必ずしもCO2を出さないライフスタイルという課題ができるかもしれません

2)、3) 人社系の役割としては素早い意思決定を伴うことと考えると思います。ただ情報に入ってもどう方がよいのか、意思決定までできず、結局にお金を浪費するとかはプロジェクトの性質によるかと感じます。

解決する課題：その学問領域が起す課題。社会に一番近いのが、人社系。実務家との違いは、考える余地や方向性を与えてくれる

福祉の研究対象がややもすれば現象を「現象化」しがちであるのに対し、人文・社会科学の研究対象は、その社会という「現象」を対象としていることから、より現象に近い側面が人文・社会科学の利点と想う。

3) 協働により生じる価値・利点は新しい何か（解決方法、研究成果、研究テーマなど）が生まれること

福祉社会を考えると、福祉の時間感覚よりも、より「長い」時間感覚の人文・社会科学の方が合っているのかもしれない（感謝です）

人社系研究者の役割は「課題解決」に最先端の「知」を導入するとともに、解決の過程を「知」にフィードバックすることかもしれない。

回答になっていないのですが、地球研のプロジェクトには福祉系主導が多いです。特に人文系の研究者の方は、課題解決型プロジェクトを「主導」するモチベーションがどういるところにあるんでしょうか？

図 9

グループ 10

リーダー：

森本 行人（筑波大学 URA 研究戦略推進室 URA）

サブリーダー：

和田 肖子（北海道大学 大学力強化推進本部 研究推進ハブ URA ステーション URA）

発表内容

（森本）グループ 10 については、立候補を募りましたところ、学習院大学の佐藤真さんが手を挙げてくれました。それでは佐藤さん、どうぞよろしくお願いします。

（佐藤）限られた時間でのディスカッションであったため、この報告では、グループディスカッションで出た意見と、発表者からの観点で報告事項をまとめました。

グループ 10 では、課題解決型プロジェクトの成功に人社系が必要かどうかという視点から、グループ 10 の参加者には事前課題を作成し、それを行っていただいた上で当日ディスカッションの中で、「人社系」、「理系」の強み弱み

を整理しました。

さらにディスカッションを進めて、課題解決型プロジェクトの成功に人社系は必要であるというメンバー全員の共通認識のもと、どうやって課題解決プロジェクトに関わる人社系研究者を増やせばいいか、そして、学際研究のチームングにおける URA の役割について話し合いを行いました。

●学際研究のチームングにおける URA の役割

まとめのスライドを図 10 に示します。学際研究のチームングにおける URA の役割のひとつが、URA が学際研究の言い出しっぺ、取っ掛かり役になるということです。そして二点目は一点目と関連しますが、URA が学際テーマを設定してみるということも重要な役割であると考えました。研究者は、自身の研究分野についてはとても詳しく造詣が深い反面、いざ学際研究のプロジェクトの事業計画書を書く際には、自身の研究領域を超えた事業となるため、専門分野以外の内容を展開するのが難しく、採択に至るには難しい内容となってしまう場合があります。おそらく、自分の研究の中で学際的なテーマを持っていないと、なかなか学際研究を企画したり、融合的な分野を作ったりすることが難しいのですが、その間を埋めるのが、URA の役割と言えます。

また、URA が研究者を炊きつける役として、大型外部資金の応募段階から人社系のメンバーも組み込むことも重要です。大型の外部資金はどうしても理系の分野に多いので、応募の段階から人社系の分野の研究者を組み込むということが、URA の重要な役割でしょう（図 10）。

●研究交流の場の重要性

最近よく 100 人論文という研究交流の場の形成の話聞きます。100 人論文とは、京都大学が考案した研究交流手法で、研究テーマや、これから研究になるかもしれない芽を 100 近く揭示する展示企画です。研究者を含む参加者は揭示に対して無記名で意見を投稿できます。分野を越えた本音の意見交換を行い、対話・研鑽の機会となっています。詳細は、ウェブサイト

テーマ：学際研究のチーミングにおけるURAの役割

- ・ URAが学際研究の言い出しっぺになる
- ・ URAが学際テーマを設定する
- ・ URAが先生をたき付ける
- ・ 大型外部資金応募時に人社の研究者を組み込む
- ・ 100人論文から共同研究を生む

個人的な関心

- ・ 課題解決、社会実装プロジェクトにおける研究者の引き際とは？社会実装まで研究者が主導するのか？？社会実装活動は研究時間なのか？？

図 10

(<http://www.cpier.kyoto-u.ac.jp/project/kyoto-u-100-papers/>)を確認していただければと思いますが、グループ10には、100人論文を企画・運営した方がおられて、事例紹介を聞くことができました。その事例では、100人論文を実施して数年目のため、学際研究の形成はこれからだそうです。事業の効果として、異なった分野の研究者間の意見交換や、個人的な共同研究が生まれているということでした。また、共同研究というと理系にスポットライトが当たりがちですが、研究交流の場では、人社系の研究のほうがいっぱいコメントがつきやすく、幅広い研究分野の研究者の関心が集まるそうです。理系の研究はすぐには理解しにくいのかコメントがつきにくいそうでした。つまり、研究交流の場では、人社系のほうが、理系に比べて関心を集めやすい、連携の可能性を大きく持っていると言えるのではないのでしょうか。

このような分野を超えた研究者の交流の場を作っていくのも、URA等研究支援者に期待される役割であると思います。

●研究プロジェクトの社会実装とは

現在、科研費以外の研究費で大きな予算を取ろうとすると、課題解決や、社会実装等が求められます。研究者がどこまでやるべきなのか疑問を感じる参加者もいましたが、社会実装まで研究者がやるべきなのか、そして、そのプロジェクトマネジメントまでも研究者がやるべきなのか、社会実装の活動は、どこまでが研究に該当するのか、議論は絶えませんでした。

【ディスカッションの概要】

●グループメンバーについて

グループ10については、北は北海道、南は沖縄まで様々な大学から参加しているメンバーで構成され、属性も大学教員、職員、URAと多様であった。チームリーダーは筑波大学の森本行人さんに務めていただき、「課題解決型プロジェクトの成功に人社系が必要か」という議題でディスカッションを行った。

●ディスカッションのテーマについての検討

「課題解決型プロジェクトの成功に人社系は必要か」というテーマはかなり広義的に解釈できる内容であるため、ディスカッションについていくつか段階的な議題を設定した。

一つは、「成功」とはなにか。採択されることが成功なのか、あるいは、チーミングして申請まで持っていければ成功なのか。そして、「人社系」とはどの分野を指しているのか。最後に、「必要か」という問いかけは、誰になにを問いかけているのか。人社系の人材なのか、要素なのか。この観点から、議題をブレイクダウンして検討していった。

●ディスカッションの場の形成

ディスカッションの進め方として、メンバーがアイデアを出しやすくするため、否定的な発言は避け、「いいね」、「すごい」、「すばらしい」というような賛辞を惜しみなく行うようにした。直感的な意見や、他者の意見の賛

同、その意見を広げていくことも推奨し、メンバーが発言しやすく、様々なアイデアをディスカッションしやすい場づくりを行った。

●課題解決型プロジェクトの成功とは

なにをもって成功とするか、メンバーの意見では、人社系の研究者が参画したチームができるということ、例えば「チーミング」を成功としてはどうか等の意見があった。事業申請し、採択に至るためには知り合ってチームを作ることが必要となる。また、チームができれば、外部資金申請以外でも研究を進めることが可能となる。

次に、「チーミングに関してどのような問題点があるか」話し合ったところ、研究者個々人では、「誰」や「どの分野」が連携可能であったり共通点を持っていたりするかわからない場合が多いのではないかという意見があった。その課題を解決するためには、研究者が出会う場が重要であるということ、そしてプロジェクトに参画してくれる研究者を増やすことが効果的ではないかという議論になった。これらの意見から、チーミングを行うには「課題解決型プロジェクトに関わる人社系の研究者を増やす」ことが必要ではないかという提案が挙がった。

一方、課題解決型プロジェクトの成功については、当初設定した課題をきちんと解決できているか、社会実装できているかが重要であるという意見もあった。チーミングの際に人社系研究者が必要かというよりも、「社会実装のために人社系が必要である」という観点、つまり研究成果が社会実装できているか、課題解決できているかという際に人社系が必要なのではないかと示唆された。この観点はメンバーの関心を集め、社会実装の時点でようやく人社系の研究者が参画することの問題点も議論された。人社系研究者が最適な形で社会実装のプロジェクトに参画できるには、「URAのような全体を俯瞰した視点で提案できる存在が重要である」という提言もあった。

なぜ、課題解決型プロジェクトが理想に近づくことができないのかということについて、一つは「人社系の研究者を知らない、出会えない（チーミング）」ということと、そしてもう一つは「人社系の研究者が参画するタイミ

以上のことを踏まえた上で、課題解決型プロジェクトの理想に近づけないのはなぜかということ掘り下げ、そのために人社系がどのように必要かという観点でディスカッションを深めることとした。

人社系の必要性を整理するため、事前課題で行った「人社系と理系の強み・弱み」分析について、さらにメンバーの考えを付箋に書いてデジタルホワイトボードに書き出した（図11）。



176

ションとも重なる点であった。

●文理融合のためになにが必要か

なぜ最初から文理で一緒にプロジェクト形成できないか、ということについては、それぞれの文化が異なっていて互いに交流しにくい点が大きいのではないかと指摘があった。文系からみると理系は専門語が多く難解に聞こえ、理系からみると文系の研究者は気難しいイメージというようなことがあり、例えば Speculate は良いけれど、Suggestion はダメなど、単語一つとってもそれぞれの分野で使われ方が異なる場合がある。

文化が違うということについても、様々な発言が挙がった。文化の違いがあるということは、ダイバーシティであると言えるが、早くチームングを行おうとすると均質的な人たちのほうがやりやすいことは現実的にある。本来は、多様なメンバーによって様々な観点から検討を行う方が課題解決には効果的なはずであるが、チームングの難しさがハードルになっている可能性があるのではないだろうかという意見もあった。

●尊重しあい交わる場の重要性

中学校の教育者として長いキャリアを持つメンバーからは、専門をお互い認めていくことの重要性を示唆された。例えば、教育現場で連携が行われる土壌として、職員室のような顔を合わせる場があることの必要性について、そして別の視点から、政策についてもエビデンスベースな理系の観点は必要であるし、様々な目線を持って課題解決を行うことは、今後より一層求められることであると、メンバー全員の意見が一致した。また、ラーニングコモンズのような〇〇コモンズ、例えば URA が定期的にいつも何かしら研究に関するイベントを行っている場を作る等、研究者が気軽に立ち寄れるシステムや場があればいい、そういう場があれば、早い段階で課題解決型プロジェクトに参画できる研究者が増えるのではという議論に発展した。

●研究交流を産む場をどうやって作るか

今までのディスカッションを踏まえ、このグループでは、「課題解決型プロジェクト（学際研究）をどう作っていくか」「チームングのために URA 等スタッフがどう関わるか」という観点から、研究者交流の場づくりについて関心が集まった。

例えば、大きな学際テーマとして脳科学や認知科学を提示し、その成果が、法律や哲学の観点からみて社会にどのような影響を与えるのかといったことを研究者に投げかけてみるなどの提案があった。そのようなテーマ設定や、法律や哲学の研究者を巻き込むのは誰か、言い出しっぱは URA がやるべき、という意見があった。

また、研究者を奮起させるテーマとしては二つの意見があり、一つは「SDGs のようなプラクティカルな社会的問題」、もう一つは全く正反対に「哲学的基礎科学」のようなすぐに何か役には立たないけれども根源的なものが考えられるとの示唆があった。

●多様な研究者が出会う「100 人論文」

研究者交流のための施策として、実際に所属組織で 100 人論文を企画・運営したメンバーから情報提供があり、参考事例としてグループ一同の強い関心を集めていた。

一般的に共同研究を組む場合には、理系のほうが具体的で連携しやすく、人社系は難しいといった印象があるが、100 人論文では、人社系の研究内容の方がたくさんコメントを集めていて、理系の方にはコメントしにくいと言う傾向があり、共同研究と交流では逆の現象があって興味深いという話だった。難解で長い説明を解消するには、端的にわかりやすく伝えてもらうよう文字数制限を行うなどの工夫が合っても良いかもしれないとの提案もあった。

また、100 人論文を実施した成果については、一対一の共同研究が多数生まれた実感があり、科研費や民間の研究助成申請等にも繋がった例がいくつかあるが、学際融合研究のような大きなテーマで複数の研究者がチームにな

るにはもう一つステップが必要で、100 人論文の場で出たテーマを展開する活動があったら良いのではないかと考えているということだった。

また、別の参加者からの情報提供として、様々な分野から申請可能な学内グラントの成果発表会を行った際、課題や悩みに対して、別の分野の研究領域だとすでに解決済みの内容があり、早速交流が生まれたそうだ。研究助成の設計として、研究交流が行われる工夫をすることも有意義ではとのことだった。